

木々の影が差し込む様子

## 潤一郎あれこれ

館所蔵「春琴抄」初版本～松子とお琴～

学芸員エッセイ



「春琴抄」初版本

お琴は、大阪の老舗薬種問屋の娘。盲目で気高く美しく、三味線の名手であった。そんなお琴にひたすらかしづき仕える奉公人の佐助・・・。谷崎潤一郎の「春琴抄」のヒロインお琴のイメージに大きなインスピレーションをあたえた女性のひとりだったといわれるのが、谷崎三度目の、そして最後の妻となる根津松子である。

松子は、船場の大商家に嫁いでいた女主人「御寮人」であった。谷崎とは昭和に入った頃に知り合い、家族ぐるみのつき合いがあったが、やがて谷崎との関係が深まっていく。

ちょうど作品が執筆されていた頃、谷崎は、下僕として女主人にかしづくというお琴と佐助を地でいく関係を松子との間に仮構し、実践したともいわれる。松子宛の手紙の宛名は「御寮人様」で、差出には、みずからを従順な召使いになぞらえて「順市」と自署した。現実の中に虚構をつくり出し、さらにそれを投影させるかのようにフィクションとしての作品を創造する。谷崎独特の執筆手法によって、この傑作は生み出された。それは、文豪の意図を敏感に受け止めることできた、最良のパートナー松子の存在があつてこそものだったともいえるだろう。

そんな虚構の遊びの相手はしかし、居心地悪く辛いものもあったと、松子は後に述懐している。

書物として形にするまでが自分の作品であるというのがモットーの谷崎は、自作の装丁にも趣向を凝らした。なかでも「春琴抄」の初版本は、漆塗りで仕上げられた美しく贅沢なもの。とりわけ試作品であった赤漆本は希少である。金色の題字はもちろん松子によるもの。美麗を極めたこの本は、昭和8(1933)年12月に刊行。翌昭和9年3月、松子と谷崎とは芦屋で同棲をはじめる。二人の恋の遊戯が昇華した逸品である。



根津松子（「春琴抄」刊行間もない昭和9年頃の一枚）

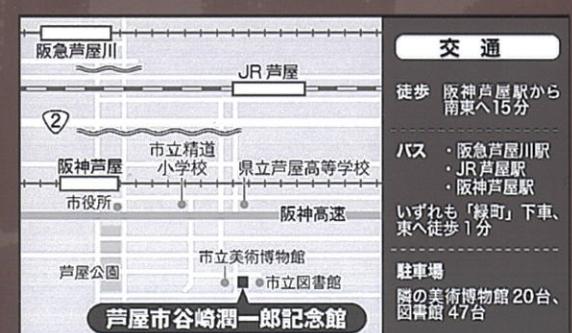
谷崎記念館だより 2021

2022年3月9日発行

発行者 芦屋市谷崎潤一郎記念館

〒659-0052 兵庫県芦屋市伊勢町 12-15

Tel 0797-23-5852 Fax 0797-38-3244

HP : <https://www.tanizakikan.com/>

芦屋市制施行80周年記念

芦屋市谷崎潤一郎記念館

vol. 3 2021

## 谷崎記念館だより

第35回 残月祭

## 榎野道流 講演会

谷崎の暮らし、  
わたしたちの暮らし



榎野道流氏

文豪・谷崎潤一郎を偲び、誕生日を祝う「残月祭」。前年度はコロナ禍のため、やむなく中止となつたが、今年度は感染対策を万全に施した上で、7月24日に芦屋ルナホールにて開催、100名の観衆が集つた。

今回は、「最後の晩ごはん」シリーズや「男ふたりで12ヶ月ごはん」など、芦屋を舞台にした作品を手がける作家・榎野道流氏に、作品やエッセイに描かれた谷崎の暮らしをテーマにご講演頂いた。光と闇が織り成す伝統的な日本の美を論じた「陰翳礼讃」を中心に、「廁のいろいろ」「幼少時代」などのエッセイに記された、自然を生かした廁の雅趣や、眞の闇が持つ力についてお話しされた。

さらに、戦時下において、創作活動から生活に至るまで大きな制約を受ける中、たゆまず「細雪」の創作を続け、毎日の食事にも楽しみを見出した谷崎の暮らしぶりをヒントに、規制の多いコロナ禍の今こそ、無駄を省いた心豊かな暮らしを楽しむチャンスと捉える必要性を話された。小説家であり医師でもある榎野氏の、鋭い視点と穏やかな話しぶりに、会場の来場者も熱心に耳を傾けた。

谷崎の旧居 岡本「梅ノ谷の家」一階の扉  
中国風の卍模様が施され、上部はスライド式の通気窓になっている。

(記念館展示品)



谷崎夫人松子とその娘

### 「『細雪』～日常への憧憬～」

秋の特別展 2021年9月11日（土）～12月5日（日）

文豪谷崎潤一郎の代表作「細雪」。そこで描かれるのは、昭和10年代の阪神間に生きる市民の、教養と財産と伝統そしてとりわけ女たちの艶やかな存在感に裏打ちされた、豊かで美しくおだやかな日常である。それは、当時の谷崎一家の生活の記録でもあり、文豪がこよなく愛した暮らしであったに違いない。

作品では、春夏秋冬の不变の自然の循環に織り込まれつつ、家族の日々の時間が流れゆく。変わらぬ春のめぐりとともに訪れる花見の春はしかし、一家にとっては年ごとに違う春なのである。日常の時間の流れは、家族の生活を徐々に変えてゆく。それは、親しく懐かしい生活世界がうしなわれてゆく過程でもあった。

「細雪」の頃はまた、戦争の暗く速い流れが、世の中を覆っていった時代でもあった。その時流にあらがうでもなくのみ込まれるでもなく、一家の豊かでおだやかな日常は、みずから喪失のリズムをゆるやかに刻んでゆくように見える。

この上もなく細やかに描き込まれてゆく、なにげなくも美しく愛おしい日々。文豪が、その至高の筆致で惜しみつつ書きとどめた、うしなわれゆきつつある生活世界を味わう。

### 「谷崎からの手紙～書簡の中の文豪～」

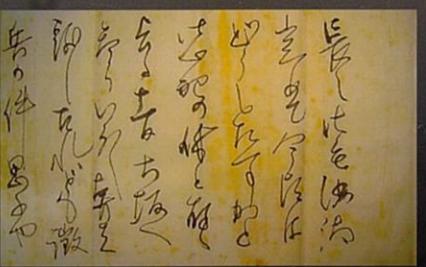
冬の特設展 2021年12月11日（土）～2022年3月27日（日）

「手紙」には、多くの情報が詰め込まれている。その文面はもとより、筆跡や文体、ハガキか封書かといった書簡の形式、便箋か巻紙かという用紙の使い分け、ペンか筆かの筆記用具の別もある。そうした多彩な手がかりからは、書き手の人となりや折々の心象風景、周囲の人々との関係性等々、多様な事ががらがみえてくることだろう。

谷崎からの手紙もまた、この文豪のさまざまな顔を浮かびあがらしてくれる。時を追うごとに刻み込まれた、作家としてまた人間としての年輪。スキャンダルの周辺で交錯する人間模様。戦争という歴史の奔流の中で遺された、いかにも谷崎らしいエピソード。一方で、世相を読み時流に合わせることにたけた商才豊かでしたたかな、作家らしからぬ意外な顔もある。

書簡の中の文豪谷崎は、じつに豊かな表情を私たちにみせてくれたのであった。

重子愛用の羽織



1912（大正元）年8月5日付旅館八千代宛書簡（谷崎26歳の筆跡）



北野恒富「雪の朝」

### 「美の文豪、潤一郎～谷崎の美か、巨匠たちの美か～」

春の特別展 2021年3月13日（土）～6月6日（日）

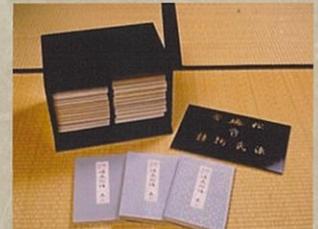
文豪谷崎潤一郎ゆかりの絵画・美術品と、その作品世界との関係性を読み解く。

傑作「細雪」の伝統とモダンの調和の美は、女たちのキモノ選びを描く小磯良平の口絵に見事に表されている。洋画家・和田三造の描く暗闇に浮かぶお琴と佐助は、日本画家による春琴抄より、谷崎が好んだものだった。谷崎一流の「陰翳の美」も、モダンの枠組みの中でこそそのものだったのだろうか。

北野恒富「雪の朝」は、谷崎好みの王朝趣味溢れる美人画の逸品。軸の表装には、松子夫人のキモノが使われている。文豪には、画中の美女と最愛の女性とがオーバーラップして見えていたのかもしれない。王朝趣味といえば、俵屋宗達「源氏物語屏風切」は一つの極み。もと源氏五十四帖の各場面を描き込めた屏風から切りとられたという数奇な伝来を持つ大和絵の名品で、源氏物語口語訳に没頭していた谷崎が、執筆の慰みにしていたという。

棟方志功は、数多くの谷崎作品の装丁・挿絵に携わった。棟方独特の「板画」とともに貴重な肉筆画の数々も味わい深く、文豪との親交が触媒となった鬼才ならではの感性のきらめきが眩しく迫る。

ここに満ちているのは、谷崎の美か、巨匠たちの美か。いずれにせよ、それは、私たちを美しい夢へといざなってくれたのだった。



潤一郎訳源氏物語  
黒漆箱限定版



### EXHIBITIONS 2021・4 — 2022・3 芦屋市谷崎潤一郎記念館

### 「大正の〈文豪〉ブーム～『文章俱楽部』のメディア戦略～」

夏の特設展 2021年6月12日（土）～9月5日（日）

昨今、近代作家をイケメン化した漫画やゲームが若者を中心に人気を集めていることから、近代文学の作家及び作品に注目が集まり、〈文豪〉ブームが生まれている。その現象に注目し、ブームの源流をたどった。

明治期には、物故していた尾崎紅葉や樋口一葉などが雑誌で「文豪」と位置付けられ、大正期には、文芸雑誌『文章俱楽部』（大正5年創刊）が戦略的に作家の写真を多用し、アイドル的な存在とした。

『文章俱楽部』は、新潮社が全国の年少の読者を対象に、文章力の修養を目指して創刊した文芸・投書雑誌で、短編小説の他に小説の作法や作家による文章談など、文章に関する記事を掲載した。作家の私生活に関するアンケートや文壇立志伝、文豪伝などを多く取り入れ、文章を自在に操る文豪を身近な憧れの的として演出している。作家たちの似顔絵をクイズにした回答や、作品のイラストを読者に懸賞募集するなど、文学を生み出す作家本人を写真や絵でビジュアル化し、「見る」楽しみを提供した。

谷崎や芥川ら大正の作家たちがどのようにイメージ化されていたか、誌面から浮かび上がらせた。



「文壇漫画」（大正9年3月）～マスク物語～  
スペイン風邪の予防にマスクをする芥川ら



『文章俱楽部』